県立美術館（洋画・日本画・先端美術）かるぽーと（彫刻・工芸・書道・写真・グラフィックデザイン）25日まで

変わろうという思い

洋画　審査員　玉虫良次

県内最大の公募展「第74回県展」（高知新聞社、RKC高知放送主催）が25日まで高知市高須の県立美術館と同市九反田の市文化プラザ「かるぽーと」で開かれている。

洋画、日本画、彫刻、工芸、書道、写真、グラフィックデザイン、先端美術の8部門。3039点の応募があり、1097点が入賞入選。審査員、無鑑査、推薦作家の作品を含めて1172点が両会場を彩っている。

今回は、特選の17人中14人が初受賞。工芸部門の岡崎壮さん、洋画部門の今崎順生さん、書道部門の岡林御舟さんは3回目の特選で、無鑑査作家入りを果たした。褒状の76人中37人が初受賞で、30歳以下が対象の新人賞も6部門で選ばれるなど初入賞が相次ぎ、新鮮な顔ぶれが並ぶ県展となった。

8部門9人の審査員は独自の判断基準で熱心に審査し、入賞入選を選んだ。審査評を紹介する。

山脇賞　「夫婦」吉川幸恵（香美市）

表現が多彩で質の高い作品が多く、入選の当落を決めるのに苦慮した。落選した作品にも惜しいものが多々あった。

作品が万人に評価されるのは難しい。同じ世代の仲間や絵の先生、憧れている人ら、身近な人に作品を気に入ってもらいたいという思いもモチベーションにしてほしい。

入賞作品は、コロナ禍の中ということもあって、ほっとする作品を選んだ傾向があったかもしれない。

特選は3点。今崎順生「職員室」は、空間の捉え方や色彩のまとめ方に優れ、動きのある発実した画面構成に仕上がっている。タッチだけでなく、体を使ってまとまりがあり、力を持った人の作品だと感じる。

作品制作にたけた人ではないかと思う。

褒状は3点。浜田啓司「トルソー『海の女』」は、流木のようなものを使った作品。象徴性があって、緊張感も感じられる。じっと見ていると伝わってくるものがあるいい作品だ。松田牧子の「秋想う」は、大きい透明感がある。その上清潔感も感じられるというように、いろんなことがうまくいっている作品だと思う。

渡辺一八大賞と県美術振興会奨励賞に輝いた岡崎都子の「野辺」は、作品として